

て従来の門閥主義がすたれ、實力のある者ならば身分の如何を問はず、官位につく道がひらけたのである。

支那では、官吏となることが非常な名譽とされ、またいろ／＼な利益も伴つたから、その志望者は甚だ多かつた。以上の諸制度は、後世の模範となつた。

宗教と學藝 宗教の盛況は、唐代文化の一特色である。道教は、諸帝に尊ばれ、更に晩唐には、社會の不安に乗じて廣く世間に行なはれ、他の宗教が禁止されるほどであつた。佛教は、貴族と結んで社會の上層部に著しく發展し、玄宗の頃までに、支那佛教の各宗派が大成された。この間、西域や南海の交通路を利用して多くの名僧が渡來するとともに、玄奘・義浄らは長年のインド旅行の後、その旅行記を著し、また重要な經典の翻譯を果した。

次に西南アジア系の諸宗教も、ゾラツストラ教(祇教)・マニ教・ネストリウス教(景教)及びイスラム教(回教)などが、在唐の諸民族にはもちろん、漢民族一部の間にも行なはれた。

唐代文化の花と咲き誇つたものに詩文がある。殊に

詩は、玄宗の頃に李白(太白)杜甫(子美)の二大詩人が現れて、空前の發展を遂げた。文はやゝこれにおくれ、安祿山の亂後、韓愈(退之)柳宗元(子厚)の二文豪が出て、大いに振るつた。わが平安時代にもはやされた詩人、白居易(樂天)が現れたのは、この後である。なほ唐初には、歐陽詢・褚遂良らによつて書道が大いに進み、繪畫も山水畫・人物畫に諸名家を出した。佛像もまたこの時代の作品にすぐれたものが少くない。

唐代文化の特質 唐代の制度・文物は必ずしも漢民族のみの力で出来たものではなく、いはばアジア諸民族の協力によつて成立したものである。したがつて周圍の諸民族・諸國家は、これに大いなる關心を寄せ、且つ喜んでこれを攝取したのであつた。わが國からも使節や學者・僧侶達がたび／＼唐に赴き、熱心にこれを研究して歸つた。わが奈良朝・平安朝の文化は全く唐代文化の縮圖ともいふべく、殊に大化の改新は唐代文化の刺戟によるところ多大である。唐に渡つた粟田真人や阿倍仲麻呂らは、いづれもかの地で、盛名をうたはれ、更に桓武天皇の御孫眞如親王は、唐の佛教に

暫定 中等歴史一

文部省

(後) ¥ .55

(41)

史 歷 等 中 定 暫

APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE Sep. 19, 1946)

發 行 所

中 等 學 校 教 科 書 株 式 會 社

著 作 權 所 有

發 行 者

文

部

省

發 行 者 別

東 京 都 神 田 區 岩 木 町 三 番 地
中 等 學 校 教 科 書 株 式 會 社

代 表 者 阿 部 眞 之 助

印 刷 者

東 京 都 半 田 區 市 谷 加 賀 町 一 丁 目 十 二 番 地
大 日 本 印 刷 株 式 會 社

代 表 者 佐 久 間 長 吉 郎

昭和二十一年九月十九日印刷 阿部眞之助
昭和二十一年九月二十三日發行 阿部眞之助
〔昭和二十一年九月二十三日 文部省検査済〕

〔後〕定 價 五 拾 五 錢

教科書審定 41/1

四 サラセン文化と南方文化

アジャ諸民族の活躍

(一) 北方民族の進出

(二) 宋及び遼・金の文化

(三) 蒙古民族の發展

(四) 漢民族の復興

(五) 回教諸民族と南方諸國

五 近世の東亞

(一) 清の興起とその盛時

(二) 歐米のアジア進出

(三) 歐米文化とアジア

十六

十七

十八

二十

二十二

二十四

二十六

二十九

三十三

満せられず、遂かにインドに渡らうとして途中で薨去せられた。なほ當時、唐の風俗や年中行事なども、わが國に傳へられたが、その中には、節分を初め、端午の節句、七夕の祭など、今日まで保存されてゐるものも少なくない。

(四) サラセン文化と南方文化

サラセン帝國 わが國で大化改新の行なはれたころ、西アジアにアラビヤ人(セム民族)が起つて、唐と相對するサラセン帝國を建てた。もと遊牧と商業の民として絶えず仲間争ひを繰り返してゐたアラビヤ人が國家統一を成したのは、偉人マホメットの力によるのである。かれは、五七〇年、メッカに生まれ、長じてのちアラビヤ精神の振興をはかり、イスラム教即ち、回教を開いて、周囲の壓迫を蒙つた。しかし、メジナに移つてからは(六三二)、武力に政治運動を加へて、その活躍目ざましく、遂にアラビヤを統一し、更に東ヨーロッパに進出しようとして病死した(六三三)。

その後繼者である代々のカリフは、熱心に布教と訓

伐を行なひ、東はインドから、西はアフリカ北部までも従へ、更にイスパニヤに達する大國を形成した。しかし、領土が廣大で統制が取れず、やがてサラセン帝國は、バグダードに都する東カリフ王國(七五〇建國)と、イスパニヤの西カリフ王國とに分裂し、その勢力もやうやく衰へるに至り、遂に東カリフ王國は、蒙古人に倒されるに至つた。

回教とサラセン文化 回教は、ユダヤ教及びキリスト教の影響を受けて生まれたもので、唯一の神アラールを信じ、經典をコーランと呼び、マホメットを豫言者とあがめて、その教法を生活に適用し、宗教と政治とを密接に關係せしめたものである。回教徒はその布教に當り「コーランが剣か」と稱へたといはれるが、かれらは異教徒をむやみに殺害したわけではなく、むしろ貢納を許して、寛大に取り扱ふ場合が多かつた。

わが奈良・平安初期のころ、サラセンでは、學問殊に化學・數學・醫學・天文學などが大いに進んだ。バグダード・カイロなどには大學が設けられ、ヨーロッパの學者も來り學び、西洋近世の科學の中で、サラセ

文化から芽生えたものが少くない。また、サラセンの建築や藝術には、なか／＼すぐれたところがあった。なほ、サラセン人は、地の利によつて盛んに東西との貿易を行なひ、今の廣東などに居留地を作り、回教寺院を建てて永住する者もあつた。當時わが國も、これらの間にワクワクの名で知られてゐた。回教は、その後、ジャバ・スマトラにも、しだいに流行した。

南方諸國 今の雲南地方には、わが天平年間に、南詔王國が興り、十餘代に互つて、唐及び吐蕃(チベット)と複雑な關係を保つた。その吐蕃は、わが大化改新、唐では貞觀のころ、初めて王國としての基礎を固め、インドから佛教を輸入し、これに土地の信仰を混へてラマ教を興した。

インドでは、わが大化改新のころ、ハルシャ王國が北部一帯を治めて、佛教及び文學を奨励し、唐とも交通したが、南方には更に別の王國があつて、名高いアジャンター石窟の彫刻を完成した。このころインド教も、婆羅門教を改革したものと成り立ち、後にインドの代表的宗教となる基礎を築いた。

四 アジア諸民族の活躍

十 北方民族の進出

五代と遼 唐の滅亡後、支那内地は大混亂を起し、北支那には、五十餘年間に五代(後梁・後唐・後晉・後漢・後周)の諸朝が興亡し、南支那は凡そ十國に分裂したが、五代の後、わが平安時代の中ごろに、宋が建國してから(九六〇)、しだいにこれらを統一した。

五代の諸國は、いづれも節度使などの武將が建てたもので、君權は弱く、軍閥が横暴を極め、道徳は衰へた。馮道といふ人物の如きは五朝に仕へ、常に宰相となつて人氣を博した。

なほ、唐の興亡は、その外域にも大きな影響を與へ、各民族の自覺を促した。安南の如きも、唐が亡びると、獨立運動を起して支那の支配を脱した。しかし、初めは王朝がたび／＼代り、後に李朝の大越國が、二百年ばかり続いた。

方(遼) 遼(遼)は、遼東の契丹民族が、滿洲の東部にも、國を建て、渤海に代り(九二六)、五代の間に、北支那の二部を合はせて國號を遼と改めた。なほ朝鮮半島でも、こ

のころ新羅が衰へて高麗が立つたが(九一八)、やはり遼に威壓されてゐた。

宋と遼 宋は開封に都し、大いに武人を抑へ、文治政策を取つて國內の平和を保ち、やがて北邊の失地を回復するため、遼と戦を交へた。當時、遼には英主聖宗が立ち、高麗を従へ、また、西北支那を領有してゐた西夏(チベット族)をも服屬せしめ、勢が最も強大であつた。かくて宋は、遼に敗れて和約を結び(一〇〇四)、毎年多くの銀・絹などを贈つた。今日蒙古語やロシア語で、支那をキタイと呼ぶのは、遼即ち、契丹の名を傳へたものである。このころ、宋においても、國家の危機を自覺して、内政の改革、國防の充實を要するに至つた。氣鋭の神宗は王安石を用ひ、大規模な富國強兵策を實行させた。その政策は、理論としてはすぐれたものであつたが、激しい反對にあひ、舉國一致の實を挙げ得なかつた。かくて神宗の死後、舊法黨の首領司馬光が新法を廢して祖宗の法を復活し、以後新舊兩黨の争ひが三、四十年も續いて、宋の國力は目だつて衰へた。

當時のビルマには、佛教が盛んに行なはれ、以つて今日に至つてゐる。なほ、スマトラの東部には、わが大化改新のころに、シュリービジャヤ王國が建てられ、一時はインド支那半島の南部まで勢力を及ぼし、長く栄えた。なほ、奈良時代には、中部ジャバに佛教が弘まり、そこに南方藝術の粹といはれるボロブドゥルの大佛蹟を遺した。

つぎに、東部インド支那地方では眞臘が發展し、新文化を興したが、これがアシコールリットの地に都城を遷したのは、わが醍醐天皇の御代のことである。當時眞臘は、物資が豊かで貿易の利も大きく、その後約百五十年を経て壯麗なアンコールワットの大佛蹟を完成した。更に東南部に位した林邑は、奈良時代のころから古城(古婆)と呼ばれ南海貿易を營んだ。これら南方諸國の文化は、彫刻その他藝術方面に見るべきものが多く、住民の文化的能力は、決して低くものではなかつた。

金と南宋 宋が多年の黨争に疲れたころ、遼もまた衰へたので、滿洲では、女真族（滿洲民族）が獨立し、國を金と號した（一一一五）。そこで宋は、新興の金と結び、いはゆる「夷を以て、夷を制す」る策を實行して、中間の遼をはさみ討ちにした。ところが、金が遼に代つて滿洲に大國を形成するや（一二二五）、宋は直接これと境を接することになり、更に苦しい立場に置かれた。しかも當時、宋の徽宗は美術に耽り、朝臣も無氣力であつた。ために宋は、たやすく金軍に破られ、都が落ちると、皇帝・皇后以下千二百人ほどが捕らへられ、滿洲に移された。その際、徽宗の子高宗は、江南に逃れて僅かに國運を保ち臨安（杭州）に都した（一二二九）。これ以前を北宋、以後を南宋といふ。

南宋の初め、忠勇な岳飛は主戰論を唱へ、しばしば金軍を破つた。しかし、高宗は、父母の敵地にあるを悲しみ、秦檜の和平策を用ひ、岳飛を殺して金に貢物を納め、淮水及び秦嶺山脈を兩國の境とした（一二三四）。かくて金は、北支那と滿蒙地方とを占有し、燕京（北京）を都とし、アジアの大國として、その勢力は大

陸に並ぶものがなかつた。以後、宋は弱いながらも國內が平和で、文化も榮え、一方、金人もさうやく支那風に化した。かゝる際、恰もわが鎌倉初期に、蒙古民族が北方に興つて、先づ金を破り、ついで宋をも滅すに至つた（一二七六）。

（三）宋及び遼・金の文化

宋代の學藝 唐の文化が國際的・貴族的であつたのに反し、宋代では、支那的な平民文化が大いに發達した。有名な宋學も、主として書院（私立學校）から興つたのであり、これには、禪宗などの影響が少くなかつた。宋學は、天地の原理や人間の本性を究めようとしたもので周敦頤・朱熹がその學者として有名であるが、別に歴史に即した大義名分論も盛んに行なはれ、朱熹の正統論は、後にわが學者の注目するところとなつた。

このほか、宋代には、印刷術の進歩とともに、實用的な政治・地理などの著述が多く世に出たが、文學にも歐陽修や蘇軾（東坡）の如き大家が現れ、唐代を凌ぐ盛觀を呈じた。なほ、佛教のうち、特に工夫、鍛錬を重

んずる禪宗が盛んになつたのも、宋代の一特色である。つぎに、繪畫や陶磁器が發達したのも、やはり平民が藝術に親しむやうになつたからである。殊に繪畫では宮廷に畫院を設けてこれを奨励したため、知名の畫家が多く現れ、徽宗もまた一流の名手であつた。宮廷の畫風（院畫）に對して、當時の文人の中には繪畫を餘技とする者が現れいはゆる南畫の流儀をひらいた。

諸發明と社會・經濟 宋代には、民衆が活動して物の利用を工夫したので、活版や火藥が發明され、羅針盤も實用に供せられた。これら諸發明は、やがて西歐にも傳はつたのであり、世界の文化史上特筆すべきものである。

このやうに宋代には、各方面に新しい研究が勃興したので、經濟界もすこぶる活氣を帯び、農家は、土地に適した作物を植ゑて、その收穫を商品化し、工場でも、親方・徒弟などが團結して器物を大量に製作した。そこで、商店にも行といふ組合が盛んになり、問屋・仲買などの仕事も發達した。かくて貨幣の要求も高まり、銅錢が廣く用ひられ、更に北宋の中ごろからは、交子と

いふ紙幣が民間に行なはれ、金もまたこれになつた。宋では、商税・地租及び專賣の收入などが主な財源となり、また、當時、宋と南洋諸地域との通商がすこぶる盛んになつたので、海上貿易の利益もまた、國費不足の補ひとなつた。このやうに經濟が發達すると、都市の生活は活氣を帯び、種々の新しい職業が興り、見せ物なども繁昌した。

遼・金の文化と日宋關係 遼・金は、ともに支那の制度を參考若しくは利用したが、北支那を廣く領有した金に、特にこの傾向が強かつた。遼が契丹人と漢人とを別々に治める官制を作つたのに對し、金は女真人と漢人とを合はせ用ひ、前者を軍事及び政治の重要な地位に置き、後者には、主として事務上のことを執り行なはしめた。

遼・金はそれらの國字をもち、また關學・詩文をも取り入れたが、特に金人は支那風に化せられ、更に兩國ともに佛教が流行して、その遺物は、滿洲や北支那などに多く殘存してゐる。なほ金代には、北支那で道教が改革され、全真教といふ新宗派が生まれたのも、

注目すべきことである。

日宋の間には公式の交渉こそなかつたが、交通は絶えず行なはれ、またわが商人で遼と通商した者もあつた。彼我禪僧の往來によつて、わが國の禪宗は大いに發達した。宋の書籍や經文とともに印刷術の傳來もあつた。繪畫において淡雅の色彩や寫實の風が好まれるやうになつたのも宋の影響であり、瀬戸焼・博多織なども宋の工藝に範を求めてゐる。その他花道の發達・飲茶の流行・宋錢の流通など、いづれも宋文化に負ふものである。この間、北宋に渡つた僧の中に尙然がある。また蔡西は南宋に寺院建築の用材を供給したやうな事實もある。

(三) 蒙古民族の發展

成吉思汗 遼・金について興つた蒙古により、北方民族の活動は頂點に達した。初め蒙古人は金に屬し、オン河上流附近で遊牧してゐたが、金末にいたつてその長にテムチン(鐵木真)が現れ、長じて内外蒙古を統一し、成吉思汗と稱した(一二〇六)。即ち、元の太祖

である。太祖は、先づ金を攻めて北支那の大部を取り、更に中央アジアから西北インドに轉戦し、別將にロシアの東南部を攻めさせ、更に西夏を滅して病死した(一二二七)。

太祖は、兵を用ひること神の如しといはれたが、一方政治の才能にもすぐれ、民衆を率ゐた。

蒙古の發展 太祖の子太宗は、先づ金を滅し(一二三三)、高麗を従へて後、五十萬の大軍を以つて歐洲に進出した。その時、大將バツ(拔都・太祖の孫)は、ロシアに入つて大勝を博し、別軍はシレジャに進み、ドイツ・ポーランド諸侯の聯合軍をワールシュタットに撃ち破り(一二四一)、更に本隊と合してハンガリー附近に殺到し、ついで蒙古軍は、南宋を壓迫するとともに、雲南・吐蕃をも攻め、更にフラグ(旭烈兀・太祖の孫)は、進んでイラン・アラビヤ方面に攻め入り、バグダードを陥れ、東カリフ王國を滅した(一二五八)。

蒙古人は騎射に長じ、狩獵を以つて武技を練り、出征には騎馬で猛進した。そして遠征や君主の推戴などの大事は、總べて諸王・重臣の大集會によつて議決し、

征服地には軍政をしき、法律は、簡單ながらすこぶる嚴重なものであつた。

世祖の事業 蒙古が年とともに發展を遂げた後、第五代の君主となつたのは、クビライ(忽必烈・太祖の孫)即ち、世祖である。かれは、都をカラコルムから大都(北京)に遷し、國號を元と定め(一二七二)、南宋の討伐に向つた。南宋では、忠臣文天祥らが防戦に努めたが、それも遂に亡びて、こゝに北方民族最初の支那全土支配が實現した。世祖は二回に互つてわが國を攻め來り、また占城・安南・ビルマ・ジャバにも進攻したが、いづれも不成功に終つた。

元の領土 蒙古は、太祖以來、新領土に同族の子弟

汗 國 名	始 祖	領 土
オゴタイ(窩闊台)汗國	オゴタイ(太祖の三男)	外蒙古の西部
チャガタイ(察合台)汗國	チャガタイ(太祖の次男)	中央アジアと新疆
イル(伊兒)汗國	フラグ(太祖の孫)	西南アジア
キプチャク(欽察)汗國	バツ(太祖の孫)	西南シベリヤと東南ロシア

を分封してゐたが、世祖は亞歐にまたがる元帝國を建てると、支那と滿洲・蒙古・西藏の大部分を元の直轄地とし、他の主な地域は、上の四汗國に分けて治めさせた。

元の衰亡 元の帝室には、一族不和のために帝位相續の争ひが多く、世祖の時にも、オゴタイ汗國を中心として、四十年に及ぶ大亂が起つた。その後、權臣のわがまもあつて政治が亂れ、元はしだいに衰へた。しかも、帝室はラマ教に心酔し、多額の國費を佛事に用ひ財政も困難になつたので、多年その壓迫に苦しんだ漢民族は、各地に反亂を起し、元は、世祖の死後凡そ七十年にして、遂に明のために滅された(一二三六八)。わが吉野時代のことである。

交通の發達 空前の大帝國を作つた元では、自然、交通が重視された。政府は、驛所を設け、内外の交通を奨めたので、既に世祖以前にも、ローマ法王やフランス王の使者が來朝し、ついで、有名なイタリヤ人マルコポーロが來遊した。かれは世祖に仕へ、元にとどまること十七年、歸國後に著したその旅行記は、廣

く世人に讀まれた。書中に、わが國をジバングと呼んで、黄金に富めることを誇張し、また、元寇のことも記してゐる。ヨーロッパ人は、この書を讀んで東方にこれが、後にコロンブスなどもこれによつて大いに動かされたといふ。なほ、元末に支那に來たイブン・バットは、北アフリカ生まれの回教徒で、當代第一の旅行家であつた。このやうに、元代には、遠く海陸兩路から西方人が渡來し、泉州・杭州・廣東などは、特に貿易港として榮え、アラビヤ人などが多く來往した。

元代の文化 東西の交通が發達した結果、西方の天文学・醫學・砲術などが元に傳はり、キリスト教も傳來し、世祖の時には、大都に教會が建てられた。このほか、佛教・道教はもとより、回教なども自由に行なはれた。殊に世祖以來は、チベットに興つたラマ教の高僧を帝師として代々尊敬したため、回教は大いに發展した。

蒙古人は、廣く東西の文化に接したので、支那の文化を輕く見て、大官にも漢文を讀まぬことを得意とする風さへあり、そのづから、儒教や詩文には冷淡である。

つた。しかし、民衆の娛樂の上から、戲曲・小説の類が發達し、元末になつて山水畫の名家が現れたのは、注目すべきことである。

社會・經濟 元の社會では、蒙古人が最高絶對の地位に立ち、ついで色目人（諸種の西域人）が重んぜられ、役所でも、かれらが上位を占めてゐた。漢民族は抑へられた。

蒙古人は、財政につたなく、殆んどこれを色目人に委せたので、失敗を繰り返したが、その紙幣の制度は、さすがに便利であつたから、廣い領内でも割合によく流通した。なほ世祖は、大都に移つてから、江南の穀物を北支那に送るため、海運を盛んにし、また、大運河の河道を現在のやうに改めた。これら施設の後世に與へた影響は、大なるものがある。

四 漢民族の復興

明の興起 元を滅したのは、明の太祖である。かれは、もと卑賤の出であつたが、すこぶる英明で、支那主義の復興を唱へて國內を平定した。今の南京に都を

さだめると、先づ元代の風俗を改めて漢民族の文化を再興し、元代に亂れた法律・制度を整へ、みづから政治にのぞんで、しきりに君權を強化した。このほか、太祖は大いに民治に努め、全國の耕地を調べて土地や租税の臺帳を作り、また、村々に學校を建てて、國民の教育を進めた。

やがて、第三代の成祖は、北京に都を遷し、みづから數回に互つて外蒙古を征した。また南は貴州・雲南を内地化し、一時、安南の地方をも合はせ、なほ鄭和に命じ、南海諸國を威服させた。鄭和は、大艦隊を率ゐて七回も遠征を行なひその一部はアフリカの東岸にまで赴いた。かくて、多くの國々が明に來貢し、漢民族の南方發展は、ここに一時期を劃した。

明の盛衰 明の初め、中央アジアに、蒙古系統のチムールの大國が興つたため、明は西方へ發展することができなかつたけれども、その勢はすこぶる盛んで、南滿洲をもその治下に置いた。なほ當時、國民の生活が充實した點では、漢・唐の盛時にまさるものがあつた。然るに、その明も成祖以來、しだいに衰へて官吏が

政治を亂したばかりでなく、蒙古東部の韃靼（今のハルハ蒙古）や、西部の瓦剌（今のカルムック蒙古）などの進攻を受け、一時、天子が捕はれたことさへあつた。しかも、東南の海岸地方は、不良の徒に荒され、附近の民衆は不安にかられた。ついで朝鮮の役に際し、明の出した援兵が、わが豊臣秀吉の軍に破られ、滿洲では、清朝の祖先が兵を起して遼東を奪回した。これらのために、明はいたゞ衰へ、遂に國內の賊徒に滅された（一六四四）。高麗は遼・金に壓迫された後、更に蒙古に屈從し、非常な虐待を蒙つた。ところがわが吉野時代の末に、李成桂が現れ、朝鮮國を建て（一三九二）、京城に都した。朝鮮の國力は國初數十年の間は盛んであつたが、やがてしだいに衰へた。

明代の文化 明代には、儒學の復興を見たが、その學風は、宋學の理論を重んじたのと異り、實踐躬行を尚び、王陽明（名は守仁）に至つて、知行合一の學が立てられた。なほ、繪畫も進歩し、特に王翬方面が發達して、織物や陶磁器の精巧なものが作られ、建築でも、堂々たる北京の宮殿などを今にとめてゐる。

ヨーロッパ人は、わが戦國のころから、インド・南洋方面に進出し來つた。そのころ天主教（キリスト教の一派）の宣教師が多く支那に來て、天文・數學・地理などの新知識を傳へた。中でも有名なイタリア人マテオリッポチ（支那名利瑪竇）は北京に教會を建て、その弟子の徐光啓はすぐれた曆法や農業の書を著した。

日明の關係 わが鎌倉末期以後、邦人の半島大陸に進出して貿易を營むもの多く、中には武力に訴へて貿易を強要する者もあり、中には支那の海賊も日本人と偽つてこれに加はり、明ではこれを倭寇と呼んで恐れられた。明の太祖はわが征西大將軍懷良親王にその取り締まりを求め來つたが、親王はこれを取り上げられなかつた。しかしその後、足利氏は勘合船と呼ぶ官船を仕立てて對明貿易の利を求め、私貿易を抑へようとした。また豊臣秀吉は征明の役を企てた。秀吉のころから南方各地に御朱印船が派遣され、日本人はすでに南方に發展してゐた支那の華僑と並んで、南方各地に活動した。

(四) 回教諸民族と南方諸國

やがてイル汗國を滅し、ついでキプチャク汗國の一部をも奪つて、チムール國を形成した。かれは回教を國教とし、産業を奨励し、學校・病院などを建てた。また西方のオスマン・トルコと戦つて勝ち（二四〇二）、更に明を滅して大帝國を建設しようとしたが、雄圖空しく途中に病死した（二四〇五）。かくてチムール國は、間もなくその領土が分裂して亡びた。

オスマン帝國 オスマン・トルコは、蒙古の壓迫を受け、イランの東北から小アジアに移り、やがて獨立して（二二九）、凡そ百年間に、バルカン半島の大部分を征服した。チムールとの會戦には敗れたけれども、間もなく勢力を回復してコンスタンチノーブルを陥れた（一四五三）。

オスマン帝國盛時の領土は、アジア・ヨーロッパ・アフリカにまたがり、皇帝はカリフとも稱し、回教を國教とした。なほ、文化方面では法律・制度も整ひ、大學や初等教育の設備もあり、文學はアラビア及びイラン風を受け、建築にも見るべきものがあつた。

ムガル帝國 インドには、わが平安中期以後、し

セルジューク王國 東カリフ王國ができて、その後百數十年たつと、わが平安時代の中ごろ、領内の中央アジア方面に、トルコ及びイラン系の王朝が分立した。やがて違が亡びると、その一族もまた、中央アジア天山北路方面に逃れ、こゝに西遼國を建てた。

わが平安時代の中ごろに、アム河流域に移つたセルジューク・トルコも、回教を信じ、しだいに西進して、遂にバグダードを陥れた。その國王は、東カリフからスルタン（皇帝）の號を受け（二〇五八）領土は一時、天山からシリヤにまで及んだ。間もなく分裂して勢威は落ちたが、その後もヨーロッパのキリスト教國と戦つて譲らず、また學校や圖書館などを建てて文化を進めた。

チムール國 成吉思汗が西遼を攻め八十年に互る命脈を絶ち（二二一九）、更に西方イラン地方の回教國を平けると、多くの回教徒が支那へ移つた。かくてキプチャク汗國も回教を採用し、イル汗國もまた、やがて回教を國教とした。

その後、明の初めに、蒙古系の英雄チムールが、チヤグタイ汗國から興つて都をサマルカンドにさだめ、

ば、西北方面から回教徒が侵入して、しだいにその教へを弘めた。かくて、インド内部に回教諸國が興亡し、その間に、チムールの子孫が、中央アジアから西北インドに入り、ムガル帝國を建てて（一五二六）、德里を都とした。

第三代のアクバル大帝が、わが室町末期に即位して（一五五六）以來、凡そ百三十年間、ムガル帝國の勢はすこぶる盛んで、インドの大部分を領有してゐた。やがてこれが衰へると、忽ち英國の進出を見たのである。皇帝の多くは回教を保護したが、國民の間には、インド教も大いに勢力があつた。また、その建築にはインド風が加味され、壯麗な宮殿・寺院などが今なほ残存して、往時をしのばしめる。

インド支那半島 東部インド支那の東京及び安南の地方では、わが平安時代の中ごろに興つた李朝が衰へて鎌倉初期に陳朝が建てられた。これは安南又は安南國と呼ばれ、蒙古兵の進攻を退けて、文化も榮えた。ところが明の成祖の時、安南は一時明の支配を受けた。しかしやがてこれを驅逐して黎朝が立ち（一四二八）、支

那の制度を採用してしだいに南隣の小城を壓した。

平安初期以來、眞臘はカンボヂヤからシヤムの一部まで領有して國力が盛んであつたが、蒙古の軍が西南支那の雲南を征服したころからシヤム族が南方に移住し、眞臘を破つて今のシヤムにスコータイ王朝を建て元とも交り、また、シヤム文字を作つた。その後わが吉野時代にアユチャ王朝が興つた(一三五〇)。この國は長期に互つて眞臘と戦ひ、アンコール地方を占有したほか、マレー半島にも發展し、王朝の命脈は約四百年間も續いた。首都アユチャに日本町が建設され、山川長政が活躍したのは、この間のことである。

なほ、ビルマでは、バガン王朝が最も榮え、國王は歴代佛教を信じて、華麗な寺院や佛像をつくつたが、後に元兵の侵入により、この王朝がたふれ、その後約三百年間群小國が分立した。

マジヤバイト王國と回教 わが平安初期から、マジヤバイト王國は佛教が衰へ、インド教王國が興亡し、やがて元の來襲した際に、マジヤバイト王國が建設された(一二九三)。この國は、東ジャバに興つて、わが吉野時代

前後に榮え、ジャバはもちろん、スマトラ・マレー半島の南半から、東はニューギニヤの一部にも勢力を張り、インド教文化を採用し、農業と外地貿易によつて國力を保つた。ところが、その屬領は壓迫に苦しんで、やうやく離反し、加ふるに、回教が傳はつて諸王侯の獨立を助けたため、各地に群小回教國が分立し、本國は二百餘年で亡びた。

わが奈良平安のころから、アラビヤ人は盛んに南海貿易に従事したが、回教の宣布には關心をもたなかつた。しかし、鎌倉中期に至り、中部インドの平原に、回教王國が確立されるに及んで、スマトラの北部にも小回教王國が建てられ、ついで回教は、マラッカを中心にしてしだいに各地方に弘まつた。回教の東南アジアへの發展とほぼ同時に、流球人が、この方面で貿易を開始したのは、注目すべきことであつた。

五 近世の東亞

(一) 清の興起とその盛時

清の興起 明の時滿洲の奥地は滿洲人の割據するところであつたが、秀吉の朝鮮出兵から凡そ二十年後、ヌルハチといふ英雄が興京(奉天省)で獨立し、國を後金と稱した(一六一六)。これが、後の清の太祖である。やがて太祖は、遼東を従へて奉天に都を遷し、滿洲の大部を領有して、清朝建國の基を開いた。金が亡びてから約四百年後のことである。

太祖の死後、後金は東蒙古を従へて國號を清と改め(一六三六)、その後しきりに明を攻め、巧みに漢人を利用して勢力を張り、兵制を整へ文字を作つて、將來に備へた。こゝに滿洲民族空前の發展が開始されたのである。

時に明では、各地に反亂が起り、遂に流賊が都に亂入して、帝室が亡びたので、清はこの機に乗じ、北京に入つてこゝに都し、南支那をも平定して、支那全土を治めることになつた。

清の隆盛 清の第四代聖祖(康熙帝)は、古今に稀な名君であつた。帝は、即位後間もなく起つた明の降將三藩の大亂を鎮め、臺灣の鄭氏を降して國內を固めた

ほか、外蒙古にも親征してこれを領土となし、更に西藏を従へ、北滿に侵入したロシヤ兵をも撃退した。なほ聖祖は、支那學を奨め、西洋科學を取り、大いに制度を修めた。

聖祖の孫の高宗(乾隆帝)もまた英明で、學術を奨勵するとともに、天山南北路を定め、四川諸地方の反亂を鎮め、インド支那の諸國をも朝貢させて、清朝最大の領土を占めた。世にこの二代を康熙(六十二年)、乾隆(六十年)の盛世と稱してゐる。しかし、清の國運はこの時が絶頂で、その後内亂が相次いで起り、また、歐米の壓迫も加つて、やうやく衰兆を示した。

清朝の政策 北方民族で北支那又は支那全土を治めたものに、北朝・遼・金・元・清などの諸朝がある。

清朝は、武力の餘り強くない少數の滿洲民族を以つて、文化の高い多數の漢民族を治めるために、地方官や下級官吏には漢人を用ひ、中央の高官を任用するに、滿漢併用を原則としたが、宮廷や軍部は總べて滿洲人で固めた。また、清朝が蒙古人を親類扱ひにしたのは、元朝が色目人を重んじたのとやゝ似てゐる。

かし、支那の學術・技藝を奨励し、しばしば全國の租税を減免して漢人を喜ばせたのは、全く元の彈壓方針と異なつてゐた。

清代の官制 中央には軍機大臣・內閣大學士らがそれ、數人づつゐて政治の顧問となり、その下に吏・戸・禮・兵・刑・工の六部があつて、政務を分擔し、その長官を尙書、次官を侍郎といつた。これらの首腦部は、滿漢併用であつたが、政治の要務は、必ず皇帝の許可を得べきものとし、以つて天子の獨裁權を確保した。

つぎに、地方は、支那本部を十八省に分け、大體各省に巡撫・提督を置いて、民政・軍務を司らしめ、また、二、三省ごとに總督府を置いて、文武兩政を統べさせたが、やはり、大事はことごとく朝廷の指圖を受けさせた。滿洲は、三省(盛京・吉林・黑龍江)に分けて軍政をし、蒙古・西藏・天山南北路などは各、その部族の長やラマ僧の自治に任せ、中央の理藩院がこれを監督した。思想と風俗、漢民族には、古來自己を中華とし、他の民族を夷狄とする考へがある。滿洲民族なる清朝は

德のある者は誰でも天子になり得るといふ漢民族の徳治思想を以つてかれらを統治しようと試みた。また、清朝は滿洲民族の風俗なる辯髪を漢人の男子に強要し、服屬の證據としようとした。しかし、この命令の出た初め、これに従はないで殺された漢人も少くなかつた。この時の強壓手段が、清朝滅亡に當り、革命の一理由となつた。

教育と文化 清朝は、都の北京や、地方の府・州・縣に諸種の學校を建て、主に漢人を教育した。それは、文武官の任用試験、即ち科擧を目的とするものであつた。科擧は、教育の普及、人材の選拔などには有効であつたが、一面、學問の自由な發展を妨げ、人物を型にはめる弊害を伴つた。

康熙・乾隆の世には、天子が支那文化を尊重し、またそれによつて滿洲民族王朝に對する支那民族の反感を薄くしようとしたので、文運もまた大いに興隆した。儒學では、明末・清初に顧炎武・黃宗羲らが現れ、古典に即して正確な事實を證據立てようとし、この學風、即ち、考證學が、後に學界を風靡した。このほか、史

學・地理學・文學などがすこぶる發達し、文字音韻の學問もまた進んだ。書畫の名家も多く現れ、書道では、六朝時代の帖や北朝の碑文の書體が研究され、繪畫では、南畫が流行して、山水・花鳥ともに世に迎へられ、また、その他の藝術も發達して、支那の傳統文化が集大成されたかたちであつた。

清朝盛時の諸帝は、すぐれた學者を宮廷に採用し、圖書集成・四庫全書など、驚くべき大部の書物を續々勅撰とした。聖祖の時にできた康熙字典など、特に有名である。かくて民間にも、著述・出版が盛んに行なはれ太平の世を飾つた。また、清朝は、明末以來支那に來てゐた天主教の宣教師を重用し、世祖はアダム・シャール(湯若望)を、聖祖はフェルビースト(南懷仁)を用ひて、天文・曆法や砲術などの改良に貢獻せしめたり、實測の地圖を作製させたりした。但し、天主教に對しては、宣教を嚴禁することもあつた。

(二) 歐米のアジヤ進出

東亞進出の端緒 ヨーロッパ人はかねてから一ルコ

ヨーロッパの旅行記などによつて東方にあこがれ、寶石・藥品・香料・綿などの東方の物産を喜んで手にとつた。然るに十四世紀以來、オスマン・トルコが勃興し、東西交通の要衝たるシリア・エジプト地方を征服し、これを通過する物品に多くの税をかけるやうになつたので、ヨーロッパ人はトルコ領を通過することなく、直接東方と交易する希望をいだいた。

かくて一四九八年、ポルトガルはバスコ・ダ・ガマがアフリカの南端を廻つてインドにいたる航路を發見すると問もなく、ゴア・マラッカを占領し、更にマカオを租借して明と通商を行ふことになつた。わが國への歐人渡來の最初たるポルトガル人の種子ヶ島漂着はこのころのことである(一五四三)。ポルトガルと並んでイスパニヤも航路の發見に努めた。即ち、イスパニヤ女王の援助を受けたイタリヤ人コロンブスが東洋への航路を求めてアメリカ大陸を發見したのを初め(一四九二)、イスパニヤ王の命を受けたポルトガル人マジランは南アメリカの南端を廻つて太平洋に出て、遂に彼の一隊はフィリピン及びモルッカ諸島に達した(一

五二二。これ以來イスパニヤはイリピンに總督を置き（一五七一）、こゝを治めることになつた。兩國はともにヨーロッパにむける新教國であつたから、東洋に向つての舊教の傳播はとみに活氣を呈し、その宣教師は支那を初め、わが國や南洋にまで渡來するやうになつた。

これら二國が本國の利益を追求する餘り、植民地の疲弊を顧みなかつた際に、オランダは商業的立場のみから植民を行なふのに成功して、この二國の間に割込んだ。即ち、先づ東インド會社を設立し（一六〇二）、ジャバのバタビヤを根據地と定め（一六一九）、總督を置いて東インド諸島を支配させた。オランダは支那に足場を得ることは失敗したが、一六二四年以來四十年近く臺灣を占領し更にセイロン島（一六四〇）及びマラッカ（一六四一）をも取り、十七世紀を通じて東洋貿易の霸權を握つた。江戸時代を通じてわが國の貿易がオランダに獨占されてゐたことは改めて説くまでもあるまい。

イギリスのインド進出 イギリスはオランダに先んじて、東インド會社を設立し（一六〇〇）、まづインドへ

の進出を企て、ボンベイ・マドラス・カルカッタを占據した。そのころフランスもまた、イギリス人と競争してインドに勢力を伸し、一時はイギリスを壓する勢を示したが、一七五七年イギリスのクライブはブラッリーの一戦に寡兵よく、インドの土侯とフランスの聯合軍を破り、霸權を握つた。インドでは二百餘年前から續いたマハール帝國がすでに衰へてゐた。イギリスはインド總督を置いて、こゝを支配させ、遂にはハガール皇帝が、イギリスへの反亂に加擔したといふ理由で位を奪つた（一八五七・安政四年）。かくてイギリス國王はインド皇帝を兼ねることになつた（一八七七・明治一〇年）。またベルマを併合し（一八八六・明治一九年）、オランダからマラッカを譲り受け、ジョホール王から、シナガポールを買収し、遂にマレー聯邦を成立させた（一八九六・明治二九年）。

イギリスの支那進出 イギリスはついで支那との貿易をはかつた。そして支那から絹・茶・陶器を求める一方、かねてインドから支那に輸入されてゐた阿片を自國商人の手で盛んに賣り込んだ。清朝はたび／＼禁

ρを出したがなほ密輸入はやまなかつた。一方、支那では、地大物博を頼んで鎖國的態度をとり、ヨーロッパ文明の影響を拒んだ。かくて一八三九年（天保一〇年）清が阿片貿易の中心地廣東に林則徐を遣はして、これを嚴重に取り締ると、兩國は遂に衝突し、ここに阿片戦争が起つた。

阿片戦争とその影響 清も、この時に及んで既に衰運に向つてゐたので、敗れて南京條約を結び（一八四二・天保一三年）償金を拂ひ、香港を割き、上海・廣東などの五港を開き、低い輸入税を定めた。これにのいでフランス・アメリカ兩國も清に進つて、ほゞ同様の條約を結んだ。

廣西省方面から起つた洪秀全は、キリストを標榜し、漢民族の復興を名として兵を起した。洪秀全は國を太平天國と號したが、かれらが清朝の辮髪をやめて、頭髪をのばしたところから長髮賊とも呼ばれた。反亂は同光三十年（一八五〇・嘉永三年）以來、十餘省に亘り、六百餘城を陷れ、一時は南京を都とする勢であり、清の官兵はこれを鎮める力がなかつたが辛うじて鎮壓され

た（一八六四・元治三年）。

清は南京條約を實行しようとはしなかつた。外國は更にその改訂を望んでゐたが、はからずも、イギリス・フランスは聯合して清を攻めるやうになり、遂に天津條約の締結となつた。かくてイギリスは北京に公使を置き、更に開港場を増し、支那内地の通商貿易に利權を得ることを約し、アメリカ・フランス・ロシアもほゞ同様の利權を得た。然るに天津條約批准のため北京に向ふイギリスの使節に砲撃を加へ、またしてもイギリス・フランスの攻撃を受けた。聯合軍は北京に進出し、清と北京條約を結んで、更に大きな譲歩をなさしめた。即ち、清は賠償金の増額を初め、英國に對する九龍地方の割讓、天津の開港、キリスト教布教の保護などを認めたのである（一八六〇・萬延元年）。

ロシアは、愛琿條約を結んで、黒龍江以北の地を占め（一八五八・安政五年）、ついで清朝を説き北京條約を結んで、ウスリー江以東の沿海州地方を収めた（一八六〇・萬延元年）。

フランスの東亞進出とインド支那半島 安南では、

わが室町初期に起つた黎朝が百餘年で衰へ、その後、江戸初期には國內が二分して相争ふうち、フランスの援助の下に阮朝の越南國が建てられた(一八〇二享和二年)。然るにその後越南は交趾支那を譲ることになつた(一八六二文久二年)。ついでフランスはカンボヂヤ及び東京地方をもその勢力下に入れ(一八八三明治一六年)、遂にインド支那聯邦を成立させた。

シヤムでは五百年も続いたアユチャ王朝がビルマの攻撃によつて亡びると(一八六七・慶應三年)、チヤクリ王朝が起り(一八八二・明治一五年)、バンコックに都した。これが今のシヤム王家である。

ビルマにはわが室町末期にトンギー王朝が建てられたが、江戸中期に至つてアロンバヤ王朝がこれに代り(一七五三)、盛時の清朝の軍を破つたことがある。しかしイギリスの東進とともに遂にイギリス領となつた(一八八六・明治一九年)。かくてシヤムはイギリス・フランス兩勢力の間に位して、獨立を保ちながら最近にいたつた。

ロシアの東亞進出 ロシヤはキノフチャク汗國以來

蒙古人の支配下にあつたが、イワン三世の時に獨立(一四八〇)。蒙古人の勢力を退けた。ついでロシアの酋長イエルクはウラル山を越えてシベリヤに進出しこれを王室に獻じた。ロシアの東進はこゝに始まり、その勢力はわが寛永年間にオホーツク海に達した(一六三八)。その後ロシアは滿洲北部に迫つたが、清の聖祖の攻撃を受け、ネルチンスク條約を結んで外興安嶺の外に退いた(一六八九)。

ネルチンスク條約後四十年ほどして、ロシアは清とキヤフタ條約を結び、外蒙古との國境を定めて貿易を開いたが(一七二七)、黒龍江以北に進出し、ついで沿海州を得た。かくて日露戦争の勃發を見るに至つたのである(一九〇四・明治三十七年)。

ロシアは中央アジア方面にも進出した。かのチムール帝國が亡びたのち、中央アジアにはトルコ民族のボハラ・ヒバ・コーカンド三汗國が割據し、互ひに相争つて衰微に向つた。

アメリカの東亞に對する關心 アメリカは他國よりも遅れて東亞に關心を拂つた。しかし十九世紀の中葉、

太平洋沿岸地方がひらけ、北太平洋の捕鯨業が發達するとともに、對支貿易船や捕鯨船の寄港地として日本の開港を要求し、わが國と和親條約や通商條約を結んだ。その後、アメリカはハワイやフィリピンを合はせ

(一八八八明治三一年)更に、對支政策を立てたが、その際列國に向つて門戸解放・機會均等を提唱した。日本は昭和六年(一九三二・民國二〇)滿洲事變を起し、同十二年(一九三七・民國二六)支那事變を起した。

四 歐米文化とアジア

歐米文化と日本 歐米勢力の東亞進展に伴ひ、アジア人は偉大なる科學文明に接するとともに、初めて民主自由の思想にもふれた。しかし歴史の古いアジア人は、この新文化の到來によつて社會・經濟・思想の各方面に甚大な刺激を受けながら、なほ進んでこれを受け容れようとしなかつた。その間にあつて日本は明治維新の大業をなし、知識を世界に求め、進んで歐米文化の長所を採用しようとした。かくて明治以來、憲法は發布せられ、議會制度もひらけ、教育施設も整ひ、

農業は改良せられ、商工業は發展し、交通・通信の機關も發達し、軍備も充實するなど、その文化の進展は著しいものがあつた。かくて朝鮮問題に關して日清戦争を起し(一八九四・五・明治二七八年)更にロシアをも破つて(一九〇四・五・明治三七八年)、躍進を重ねた。

支那の自覺と清の滅亡 北京條約の後、歐米勢力の進出が少しく静まり、内外の事件が定まると、支那は小康を得て政治改革を行なひ、國威の回復を期した。これを同治中興といひ、わが明治維新前後のことである。

しかしその改革は一部の者の自覺に過ぎず、國民大衆は一向覺醒しなかつたので、十分の成功を収めることはできなかつた。その後、日清戦争に敗北を喫すると、變法自強の運動が起り、徳宗(光緒帝)は康有爲らを擧げ用ひて、急激なる改革を試みた。しかしながらこの改革もまた母后西太后らの反對を受けて失敗した(一八九八・明治三一年)。これを戊戌の政變といふ。

清人の覺醒は一面改革運動とともに、他面に排外運動をも伴つた。さればこの政變に伴ひ、保守排外の動きは却つて極端となり、遂に北清事變、即ち義

和蘭の亂を惹起した（八九九・一九九〇明治三二・三年）。この暴動には清朝も加擔したが、列強の武力によつて忽ち鎮定せられたので、こゝに清は屈し、朝野を舉げて改革運動に乗出すことになった。

しかし、この時支那を眞に更生させようとするには、もはや清朝に望みを託してはゐられなくなつた。改革の範を求めるために日本に送られた多くの留學生すらみな清廷打倒の方向に走つた。かくて孫文らを中心とする革命黨は滅滿興漢の旗じるしをかげて清朝打倒をはかつた。かくて宣統三年（一九二一・明治四五年）清朝は倒れ、二百六十八年の歴史は終りを告げて、中華民國が成立したのである。

革命後の支那 中華民国に入つてからも支那は長く動搖を續けた。即ち北支那は多くの軍閥の争覇の巷となり、革命派は南支那の廣東に據つて、國民黨を立て、おもむろにその實力を養ふのほかはなかつた。然るに民國十四年（一九二五）革命の父と呼ばれる孫文が死ぬと、そのあとを承けた蔣介石は孫文の立てた三民主義の精神を繼ぎ、新生活運動と稱する生活刷新運動

をも採用し、しだいに南方の勢力をかため、遂に北伐の途によつて、北方軍閥の覇者張作霖を追つて全國を統一した。しかしその後蔣介石に反對する勢力は相次いで現れ、殊に共產黨と國民黨の對立も激しかつたが、たまたま日本が大陸進出の歩武を進めるに及んで、反日抗日の必要から國內の結合は強められた。かくて滿洲事變から、更に進んで日支事變へと突入したのである。

アジア史上の日本 われわれはアジア史を學んで、アジアの諸民族が互ひに深い關係を保ちながら、來たことを知つた。思ふに日本がインド及び支那を中心とする大陸文化から得たものに較べれば、日本から他に與へたものは極めて少かつた。日本はこのまゝ、諸民族と和協して、世界の進運に貢獻すべきであつたが、他を壓し遂に日支の衝突を起したばかりでなく、引いては米英に對する挑戰を敢へてした。かくして慘敗たる敗北に終つた。